

「ほんもの」に触れる食農教育の山小屋 農文協・信州つがいけ食農学習センター

長野県北安曇郡小谷村(おたりむら)梅池高原(つがいけこうげん)というと、冬はスキー、夏はアルプス登山として有名なところだ。標高約千坪のこの高原の一隅に「農文協・信州つがいけ食農学習センター」はある。ドイツトウヒに囲まれた山小屋のような施設だが、このセンターが最近とみに「食農教育」体験の受入れに力を入れているという。いったいどんな体験をしているのか、その様子を少し覗いてみよう。

伝統的な「インスタント食品」に夢中

農業高校のグリーンツーリズム・セミナー

梅池の山々の木々が芽吹き、緑も豊かになった六月、みなさんが普通に食べているに、地元長野の農業高校の生徒たち二十一名が、このセンターに一泊二日での体験をしにやってきた。グリーンツーリズムを学ぶことを目的に、まずは長野県の豊かな食文化を見直そうと授業の一環として先生が企画したものだ。生徒たちは到着早々、昼食作りから始まる。メニューは「はやそば」というもの。農家のお母さんたちと一緒に活動してきた講師の池田玲子さん(元長野県生活改良普及員)が「信州と分かれて、そば粉を混ぜる」といって、そばを混ぜる



フライパンにへばりつき、できたそばから「はやそば」を夢中で食べる



初めて口に入れた生徒の第一声は、「ほんとうにそばの香りがするーうまいー!」と、季節季節に取れた野菜に味付けをしたものを使おう。一度に三〇個くらい夜なべで作っておき、翌朝の朝食の補いや、野良仕事に行つたときに食べたものだ。そばと一口に言っても、そば切り(現在、ふつうに食べているそば)だけでなく、色々な食べ方があるのだ。昔の食には、「ハレの食」と、ふだんの「ケの食」と、めりはりがついていて、ハレの日は嬉しさが倍化したなど、昔の暮らし方を学びつつ、お腹も十分に満たされていた。

そばと一口に言っても、そば切り(現在、ふつうに食べているそば)だけでなく、色々な食べ方があるのだ。昔の食には、「ハレの食」と、ふだんの「ケの食」と、めりはりがついていて、ハレの日は嬉しさが倍化したなど、昔の暮らし方を学びつつ、お腹も十分に満たされていた。

そばと一口に言っても、そば切り(現在、ふつうに食べているそば)だけでなく、色々な食べ方があるのだ。昔の食には、「ハレの食」と、ふだんの「ケの食」と、めりはりがついていて、ハレの日は嬉しさが倍化したなど、昔の暮らし方を学びつつ、お腹も十分に満たされていた。

村の暮らしが見えてくる 「おやき」づくり

教師を対象にした「食農教育講座」

緑も一番濃くなった八月には、食農教育に思いを寄せる教師たちが全国から集まり、「食農教育講座」が開催された。この講座は(社)農文協が毎年夏休みに開いている二泊三日の講座で、技を極めた「地域の先生」を講師として招き、地域に目を向けた総合的な学習の時間を切り口を学ぶという目的で企画されたものだ。今年も地元小谷村の「味な会」という郷土食研究グループの松澤さんからおやきの作り方を教わった。



小谷村では「おやき」のことを「ちやのこ」と言う。小麦粉で作った皮に、蒸してすり潰したジャガイモを混ぜるのは、この小谷村ならではのものさうだ。中



そばと一口に言っても、そば切り(現在、ふつうに食べているそば)だけでなく、色々な食べ方があるのだ。昔の食には、「ハレの食」と、ふだんの「ケの食」と、めりはりがついていて、ハレの日は嬉しさが倍化したなど、昔の暮らし方を学びつつ、お腹も十分に満たされていた。

そばと一口に言っても、そば切り(現在、ふつうに食べているそば)だけでなく、色々な食べ方があるのだ。昔の食には、「ハレの食」と、ふだんの「ケの食」と、めりはりがついていて、ハレの日は嬉しさが倍化したなど、昔の暮らし方を学びつつ、お腹も十分に満たされていた。

「体験」を通して見えるもの

いま、こうした「体験学習」や「体験旅行」が注目され始めている。手を使い、舌を使い、体の五感を使った「生の体験」が求められる時代になっているのだ。最近では観光業でも「見る旅行」から「体験する旅行」へと意識が変化している。決まられた観光コースを回るだけでは、飽き足らなくなっているのかもしれない。

地域に根ざした食農教育ネットワークに参加しませんか

食農教育ネットワークは、学校と地域の連携の仕方や地域素材の教材化について研究をすすめることで、子どもたちの「生きる力」を育み、元気な地域をつくるためのネットワークです。学校の先生はもちろん、地域に根ざした食農教育を応援したり、地域づくりにかかわる方々にもご参加いただけます。

このネットワークの主な事業は、①各地方の研究会での研究の推進と、研究成果の『食農教育』誌上やホームページでの発表、②インターネット上のポータルサイトの運営(国や県の食農教育関連事業の紹介、研究発表コーナー、会員用掲示板)、③会員向けのメールマガジンの発行(二〇〇五年三月開始)等々です。

※資料請求や、メールマガジンの配信希望の方は、Eメール abe-m@mail.ruralnet.or.jp、TEL 03-3585-1149(農文協教育雑誌編集部)まで。

農文協 定期購読受付中

農家に学ぶ「いのちの授業」

〔37号・2004年11月〕特集 ●800円

作物 家畜、田畑：日々自然とつながる農家の営みから身近な命に触れ、生と死に向き合う/アイガモのいのちをいただくまで、自分で飼ったヤギ肉は本当においしい、ほか

バックナンバー紹介 ●各800円

- 30号 保存食から地域がみえる
- 31号 校区コミュニティ元年!
- 32号 計画づくりは「振り返り」から
- 33号(増刊号)給食を生かす授業づくり12カ月
- 34号 お母さんを学習応援団に
- 35号 川と遊ぶ 暮らしを学ぶ
- 36号 食育で校区が元気づく

食農教育

年7回(隔月十増刊号)
定価800円、年間購読料5600円

いのちのつながりにふれる不思議。地域の人に出会う驚き。「ナマの体験」が子どもたちをひきつけ、子ども自身が探究する学習が始まる。地域全体で学校を応援し、地域を賑やかにする教育実践誌。